みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

アラビアンナイト：ファンタジーの源流を探る

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2013-02-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西尾, 哲夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4799

第十二回　12月16日（木）放送／12月17日（金）再放送

暴夜（あらびや）の夜明け　本邦翻訳事情

『開巻驚奇暴夜物語』――かいかんきょうきあらびやものがたり

日本で最初にアラビアンナイトが紹介されたのは、一八七五（明治八）年のことでした。翻訳者は山梨県出身の元幕臣、永峯秀樹（ながみねひでき）（一八四八～一九二七）です。永峯は海軍兵学校で英語を教えていました。外国の歴史書を読むうちに世界の情勢を知り、列強による植民地化を避けるには、海軍力の整備が大切だという考えから兵学校への入学をこころざしたとされています。『開巻驚奇暴夜物語』の序文には、善悪には相応の報いがあることを知り、あわせて外国の事情にも通じることができるだろうという意味のことが書かれています。

永峯は蘭法医の息子として生まれ、当時の習いとして漢文の教養を身につけていました。『開巻驚奇暴夜物語』は漢文混じりの流麗な文体でつづられていますので、冒頭部分を少しだけ紹介しておきましょう（原文は漢字とカタカナですが、ここではひらがなに変換して適宜句

読点を入れました)。

昔、佐々爾安(サッサニアン)の朝に一人の英主あり。此帝、生まれながら智仁勇を兼備して、また幕下に勇将健卒多く、臣民は之を愛敬し敵国は之(これ)を恐怖したり。帝に二人の皇子あり。兄の皇子を須加里阿(スカーリア)と名づけ弟の皇子を須加是南(スカゼナン)と名づく。共に賢明孝慈の誉れ高く、万民熙々(きき)として君を仰ぐ。

ちなみに第七回で各版を比較したシャフリヤールの妃と愛人の不倫場面は次のような表現になっています。

数対の男女、青天白日を憚(はば)からず青苔に座し、一対一対に相乗れる者あり。王、怪しみ是れ、何人ならんかと瞳を定めて熟(よ)く視(み)れば、豈図(あにはか)らんや中において最も美皃(貌)華服なる婦人は別人にあらず、即ち兄帝の愛后なりき。

永峯版アラビアンナイトは、タウンゼント版(ガラン版をもとにしたスコット版をさらに書き改めたもの)に拠っていましたが、ガラン版でいうと第一巻(「漁夫の話」まで)を訳出したのみでした。つまり、アラジン、アリババ、シンドバッドなどの有名な話は未紹介のまま

だったのです。なお永峯は、アラビアンナイト以外にもギゾーの『ヨーロッパ文明史』を英語から翻訳しています（『欧羅巴文明史』）。これは福沢諭吉にも大きな影響を与えました。

『全世界一大奇書』

永峯版アラビアンナイトの八年後、井上勤（一八五〇～一九二八）による『全世界一大奇書』（一八八三）が出版されました。井上も永峯と同じように蘭法医の息子でした。井上版アラビアンナイトは多くの読者を獲得して版を重ね、青少年の夢を育んだのです。なお、井上はアラビアンナイト以外にもシェイクスピア、ジュール・ベルヌ、トマス・モアらの作品を数多く翻訳しています。

現在、永峯版アラビアンナイトは国立国会図書館の電子図書館で閲覧することができますが、印刷部数が少なかったこともあり、古書店にはあまり出まわっていないようです。一方、井上版アラビアンナイトはロングセラーになりましたので、初版にこだわらなければそこそこに流通しています。手元に明治四十三年発行のものがありますので、永峯版と同じように序文と王妃の不倫場面を確認しておきましょう。ちなみに蔵書票を見ると、我が家にやって来た井上版アラビアンナイトは、今治警察署（愛媛県）の蔵書だったようです。

井上版アラビアンナイトの序文には「アラビヤンナイト物語は、昔から天下の奇書として有名なものである……天下の奇書は、何時代にも何人の前にも、天下の奇書で祖先を楽しま

しめ、其人を楽しめた様に、此物語は子々孫々をも楽しましめる使命を有して居る」とあります。この文章からもわかるように、井上は永峯とは異なり、アラビアンナイトの娯楽性に注目していたようです（かな遣いの一部を変更）。

かくてこの園中に集まり来たりし黒人らと王妃および宮女のあいだにいかなることを為したるやその事実を記述せんは道徳の許さぬところなるのみならず、これを記するも益なければこのくだりは筆をさしおき、単に西加亞世南（スカーセナン）は我が親愛なる兄上もおのれのごとく不幸の身となりたることを目前にくわしく見たりというまでにて充分この事情の如何をば読者も察し得らるべし。

井上勤訳『全世界一大奇書』（1886）の扉より。初版は1883年。

この一節からもわかるように、井上版アラビアンナイトも、露骨な性愛描写を省いたガラン版を底本としており、版を重ねるうちに永峯版に入っていなかった「バグダードの荷担ぎ屋と三人の娘」や「シンドバッド航海記」なども収録されました。

井上版のシンドバッドは第四航海で生きた

まま墓場に連れてこられた陪葬者を殺していますし、第五航海では海の老人の頭を砕いていますが、「バグダードの荷担ぎ男」では三人娘が全裸になってふざける場面が省かれています。つまり井上版アラビアンナイトに夢中になった読者は、異国情緒あふれる世界で展開する不思議な話に魅了されながらも、この物語集が持っていた官能的な側面に触れることはなかったのでした。明治期日本の読者は、十七、八世紀ヨーロッパの読者と同じような形でアラビアンナイトに接していたわけです。ただし日本では中東世界との接触がほとんどありませんでしたから、アラビアンナイトの翻訳紹介をきっかけとして欧米で誕生したような東方小説は出現しませんでした。

大正浪漫とアラビアンナイト——児童文学の誕生

明治期に翻訳紹介されたアラビアンナイトは永峯版と井上版だけではありません。アリババは『波斯新説　烈女乃名誉』という訳題で一八八七年に、アラジンは『亜丁刺物語　一名怪シノランプ』として一八八八年にそれぞれ翻訳されました（アラジンは冒頭の一部のみ）。また、この他にも単話形式での翻訳が続き、明治期にはガラン版に入っていた物語のほとんどを日本語で読むことができるようになりました。

やがてアラビアンナイトに題材を求めた小説も発表されるようになります。前章で紹介したミステリー仕立ての「三つのリンゴ」も、尾崎紅葉が『東西短慮之刃』（一九〇二）とし

て翻案しています。「三つのリンゴ」は永峯版にも井上版にも入っていませんが、当時の欧米ではアラビアンナイトはすでに定番となっていましたから、原書の入手自体はさほど困難ではなかったと思われます。

井上らの翻訳によって親しまれてきたガラン版の物語は、明治を経て大正期に入ると児童文学としての地位を確立していきます。明治末期には巌谷小波による一連の昔話シリーズが出版され、アラビアンナイトからはアラジンや黒檀の馬などの四編が採られています。日本に限らず、昔話や民話を童話として編集するさいには、オリジナルの作品に含まれていた民俗的な意味や年少の読者にはふさわしくないと判断された部分を削ってしまう場合が多く、巌谷による童話も例外ではありませんでした。欧米での場合と同じように、児童向けにリライトされることで平準化が進んだのです。

さらに大正期になると、一九一五年には日本児童文学史上の記念碑的出版物とされる冨山房の「模範家庭文庫」が創刊されます。「模範家庭文庫」の最初の二巻となったのが『新訳アラビヤンナイト』でした。その三年後には鈴木三重吉による児童雑誌『赤い鳥』が世に出ました。こうして児童文学というジャンルが確立すると、挿絵画家も活躍するようになりました。美少女画で一世を風靡した蕗谷虹児、多彩な童画で知られる初山滋などもアラビアンナイトの挿絵を残しています。

児童文学ではありませんが、一九二五～二八年には、森田草平によるレイン版の翻訳が出

版されています。先述したようにレインはきわどい箇所をすべて省いてしまったのですが、児童を読者に想定していたわけではありませんから、中東を舞台とした物語を読むために必要な背景知識に関しては正確な注釈をつけていました。森田版は原著の注を訳出しており、日本最初の学術的なアラビアンナイト訳として高く評価されています。

森田は前書きで「アラビアンナイトは子ども向けの本だと思われているが、実は大人でなければ読めないような類のものである」という意味のことを記しています。この時期になると、児童書の定番として親しまれてきたアラビアンナイトには、もう一つの顔があることが認識されるようになっていたのです。

こうして森田版アラビアンナイトの二年後には酒井潔（さかいきよし）によるマルドリュス版の抄訳、四年後には大宅壮一（おおやそういち）によるバートン版全訳が出版され、好色文学としての比重が一気に増すことになりました。

マルドリュス版とバートン版の翻訳

森田版アラビアンナイトの出版よりも前から、一部の知識人はアラビアンナイトが児童向けの作品ではないことに気づいていました。第八回で触れた南方熊楠以外に谷崎潤一郎や芥川龍之介もバートン版について記しています。

リチヤアド・バアトンの訳した「一千一夜物語」――アラビヤン・ナイツは、今日まで出てゐる英訳中で先づ一番完全に近いものであるとせられてゐる。……バアトンの「一千一夜物語」十七巻の中、七巻は補遺である。……殊に亜剌比亜並びに東方諸国の風俗に関する論文は、学術上の貴い研究資料であると共に、専門家ならぬ者にも頗る興趣あるものである。バアトンは本文を、一話一話に分けないで、原文通り一夜一夜に別けてゐる。又、韻文は散文とせずに韻文に訳出してゐる。之を以て観てもバアトンが如何に原文に忠実であつたかは推察出来ると思ふ。……バアトンは又基督教的道徳に煩はされずして、大胆率直に東洋的享楽主義を是認した人で、随つて其の訳本も在来の英訳「一千一夜物語」とは甚だ趣を異にしてゐる。（大正十三年七月談）（芥川龍之介全集　第四巻「リチヤアド・バアトン訳「一千一夜物語」に就いて」　筑摩書房）

芥川は、バートンの序文をなぞる形で「ガラン版は完訳ではない」としており、バートン版に接する機会のあった知識人のあいだでは、他のどの版よりも多くの物語を収録したバートン版こそが、アラビアンナイトの最終完全形態だという見方が固まってきたことをうかがわせます。大宅壮一によるバートン版は一九二九～三〇年に全十二冊の形で出版されましたが、時代状況のため全文にわたって伏字が多く、注釈も訳されていませんでした。バートン版のより完全に近い訳としては大場正史によるものがあり、こちらは文庫化されて現在でも

流通しています。

マルドリュス版の初訳は、抄訳の形で一九二七年に出ています。ただしアラビアンナイトという題名は伏せられており、部数もわずかに五百部でした。訳者は性愛文学の著者として知られていた酒井潔です。その二年後には西条八十らが解説を担当した『画譜一千一夜物語（上巻）』が出版されました。これは画集の体裁をとっており、フランスのファスケル社から出た挿絵入りマルドリュス版に収録されていた挿絵を使っています。さらに一九四〇年には豊島与志雄らによる全訳の刊行が始まりました。全巻の完結は戦後の一九五九年。このマルドリュス版全訳は文庫化されましたが、現在は一部品切れとなっています。

中東とのかかわり——シルクロードの彼方の世界

日本と中東世界とのかかわりは、文化的にも歴史的にもそれほど深かったとは言えません。現代の日本人は中東に対して、テロが頻発する危険地帯というイメージと、シルクロードの彼方にあるファンタジー世界という相反する二重イメージをいだく人が多いのではないでしょうか。

鎖国体制下にあった江戸時代には、海外と接触する機会はあまりなかったのですが、ラクダが見世物として全国を巡業し、たいそうな人気となりました。なかでも雌雄のペアで地方を回ったヒトコブラクダを見物すると、夫婦仲が円満になると評判になり、護符の類が飛ぶ

大阪で刷られたラクダ見世物興行のための引札（1823年頃）（国立民族学博物館蔵）

ように売れたそうです。宣伝ビラにあたる「引札」にはラクダの効能が挙げられており、ラクダの尿は皮膚病によいと書かれています。江戸時代を通して最もインパクトのあった中東情報は、ラクダの見世物興行だったのではないでしょうか。

一方、知的エリート層のなかには、新井白石のように積極的に西洋事情を求めた人々や、『甲子夜話』の作者、平戸藩主松浦静山のように蘭書を収集していた大名もいました。新井白石の『采覧異言』（一七二五？）には、漢籍にもとづいたメッカやムハンマドについての説明もあります。江戸時代の中東情報は、蘭書と漢籍という二つの経路で日本にもたらされたのです。たとえば江戸末期にアラビア文字に関する記述を残した儒者藤田東湖は、漢籍をとおしてアラビア文字についての情報

を得ていました。

また、江戸期の庶民は、絵地図などを通して最低限の中東情報を得ることができました。なかでも一六四五年に作成された「万国総図」をもとにした木版画は、庶民向けの百科事典である「節用集」に収録されていましたから、一般の人もこれに接することができたのです。「万国総図」は「世界図」と「世界人物図」が一対になっており、「世界人物図」にはトルコとペルシアの人物図が描かれていました。

ただし江戸時代に広く出回っていた世界地図は、「万国総図」のような西洋式のものだけではありませんでした。庶民のあいだでは仏教の世界観にもとづくいわゆる三国図が影響力を持っていたようです。仏教で言う三国とは、日本、中国、天竺（てんじく）（インド）を指しています。三国図では仏教発祥の地である天竺を中央に置き、中国と日本をその東に描きます。したがって「世界人物図」に描かれていたペルシアは、天竺の西に小さく描かれるのみでした。

ところが西洋の地理知識が広まってくると、天竺は世界の中心ではなくなっていきます。これに付随してもともと天竺の周縁の世界でしかなかったペルシアを含む中東世界は、ますます遠い世界となっていきました。やがて明治になってさまざまな英語書籍が一気に翻訳されるようになると、ヨーロッパの中東観も輸入されました。先にも触れたようにヨーロッパにとっての中東とは、自分の姿を映す鏡のような存在でした。中東はヨーロッパの他者であり、ヨーロッパが自己を確認するためになくてはならぬ存在だったのです。

天竺の向こうに広がる異郷としてしか中東を意識できなかった日本では、他者としての中東イメージは生まれませんでした。近代化にめざめた日本は自分の姿をヨーロッパに重ね、ヨーロッパが中東に向けたのと同じようなまなざしで中国をながめましたが、その結果として天竺の向こうの遠い世界という中東への視点が確定したのです。近代以降の中東が、日本の内省的自己像に反映されることはありませんでした。近代的な合理精神から見ればすじのとおらない不思議な話が展開するアラビアンナイトは、日本人の中東イメージを体現するような作品なのです。

日本のアラビアンナイト翻訳の出版

1875(明治8)年	永峯秀樹『開巻驚奇暴夜物語』
1883(明治16)年	井上勤『全世界一大奇書』
1887(明治20)年	アリババ翻訳「波斯新説烈女乃名誉」
1888(明治21)年	アラジン翻訳「亜丁刺物語 一名怪シノランプ」
1902(明治35)年	「三つのリンゴ」翻訳、尾崎紅葉「東西短慮之刃」
1925(大正14)〜1928(昭和3)年	森田草平によるレイン版翻訳
1927(昭和2)年	酒井潔によるマルドリュス版の抄訳
1929(昭和4)〜1930(昭和5)年	大宅壮一によるバートン版全訳
1940(昭和15)〜1959(昭和34)年	豊島与志雄らによるマルドリュス版の全訳
1966(昭和41)〜1967(昭和42)年	大場正史訳『バートン版千夜一夜物語』
1966(昭和41)〜1992(平成4)年	前嶋信次・池田修によるアラビア語原典（カルカッタ第二版）からの全訳